

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	A-152	15-047 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Suicidality and its relationship with depression, alcohol disorders and childhood experiences of violence: Results from the ESEMeD study. 自殺傾向とそのうつ病、アルコール依存症及び幼少期の暴力の経験との関係 : ESEMeD 研究の結果		
執筆者		
Hardt J, Bernert S, Matschinger H, Angermeier MC, Vilagut G, Bruffaerts R et al.		
掲載誌		
J Affect Disord. 2015 Apr 1;175:168-74. doi: 10.1016/j.jad.2014.12.044.		
キーワード		PMID
自殺、精神疾患、アルコール依存症、暴力		25618003
要 旨		
<p>目的： 自殺は多くの国で問題になっており、2002 年の WHO の報告によると、死因の中で第 13 番目に当たる。自殺傾向とは、自殺念慮、計画、未遂として定義される。自殺傾向は多くの精神疾患と関連が見られ、幼少期の身体的・精神的な暴力の経験も危険因子として報告されている。そこで、どのような因子が自殺傾向と関連があるのかを調べた。</p> <p>方法： 精神疾患と幼少期の暴力の経験は ESEMeD 計画に属するベルギー、フランス、ドイツ、イタリア、オランダとスペインの特定の研究機関に属さない 18 歳以上の成人から 8,796 人の回答者を得た。ランダムにサンプルを 2 分割し、1 つのサブグループでは、グラフィカルマルコフモデルを用いて自殺傾向を予測し、その予測値について残りのサブグループで交差検証を行った。</p> <p>結果： 自殺傾向のうち、92.6%が自殺を考えたことがなく、5.6%が自殺念慮もしくは計画をした者で、1.9%が自殺未遂者であった。自殺傾向の中でうつ病で一番 z 値が高く 14.29 であり、2 番目の因子が暴力の経験で z 値は 7.26 であった。アルコール依存症も自殺傾向を予測するが、他の因子より効果は小さかった。</p> <p>結論： うつ病に加えて、幼少期の暴力の経験は自殺傾向の重要な危険因子になることが分かった。家族間の暴力を防ぐのは難しいが、心理療法や臨床研究において、暴力の経験についての知識や危険因子の理解があることは有益である。</p>		